

【2017/6/25 経済学部ワークショップの様様】

《ワークショップ ReD》

ハンセン病スタディーズの前線

国立ハンセン病資料館・主任学芸員 西浦直子

滋賀大学教育学部・准教授 宮本結佳

滋賀大学経済学部・教授 阿部安成



ハンセン病史をハンセン病問題として考える、とはどういうことか——たとえば本ワークショップ報告者の議論をみると、そのひとりである西浦直子は、「らい看護」という場面や機会をとりあげ、本病にかかわる固別の看護とそこから展開する看護そのものを分ける看護を担うものの言をとりあげ、また宮本結佳は、ある土地や地域に展開する「アートプロジェクト」を考えると「サイト・スペシフィック・ワーク」という観点をもうけている。

前者の議論は、ハンセン病史を、歴史の一部分やあるひとつの領域とみなすのか、それとも、ハンセン病をめぐる過去から現在までのようすをいま考えることをとおして、歴史というものの組み立てや編み方や表現の模索につなげようとするかの分岐を展望させるだろうし、後者の観点は、生活者の暮らしや生(life または lives)を、なかなか残りにくい彼ら彼女たち自身の言葉や、他者の観察や描写による記録から再構成しようとする民衆史研究につうずるところがあるとおもう。

ここ5年にわたり、わたしたちはハンセン病にかかわる療養所がある大島をフィールドとして、いくつかのプロジェクを実施し、ディスカッションをしてきた。その成果を最前線などと掲げようとはせずに、せいぜい前線のだと自覚して、そこにある果実をひらいてみる試みがこのワークショップだった。ただ、前線は気象用語では「気象変化に重要な役割を果たす」交線をいうとのこと(『広辞苑』)。わたしたちの仕事が、なにとなにの交わりに位置するのか、これからさらに、より明瞭にしてゆこうとおもう。

出席者のひとり(学部生)が最後に、ハンセン病のことはまるで知らなかったし、きょうの報告や議論の内容も充分には理解できていないが、療養所に暮らす人びとの幸せを考えたい、と述べたことが、わたしの印象に残っている。わたしたちはおそらく、療養所に生きるひとたちを幸せにすることはできないだろう。ただ、彼ら彼女たちが感じたかもしれない幸せを歴史のなかで考えることはできるはずだとおもう。(阿部安成)